

寛永諸家譜

藤原氏已四冊之因一
利仁流

102

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186(102)	
函號	附 76	1



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





加藤

寛永誌家系圖傳

藤原氏

己一 小家

利仁流

加友

淺草文庫

果

三思

先祖よりこのころに女玉之河を以て

長江を

嘉明

たふのけ 後五位下

中園同前

之和九年京部小とひく後五位下

り叙と

寛永二年二條河原のとき約堤と

何と

同八年九月十二日江戸よとひて六十

九条にりて卒と

法名通譽

明成

武部少輔 中園山城

寛永十一年京部よとひく後五位下

小叙と

日日約堤り何と

明利

氏部大將

之和二年正月十九日後五位下と叙と

明勝 あきかつ

承之郎 や

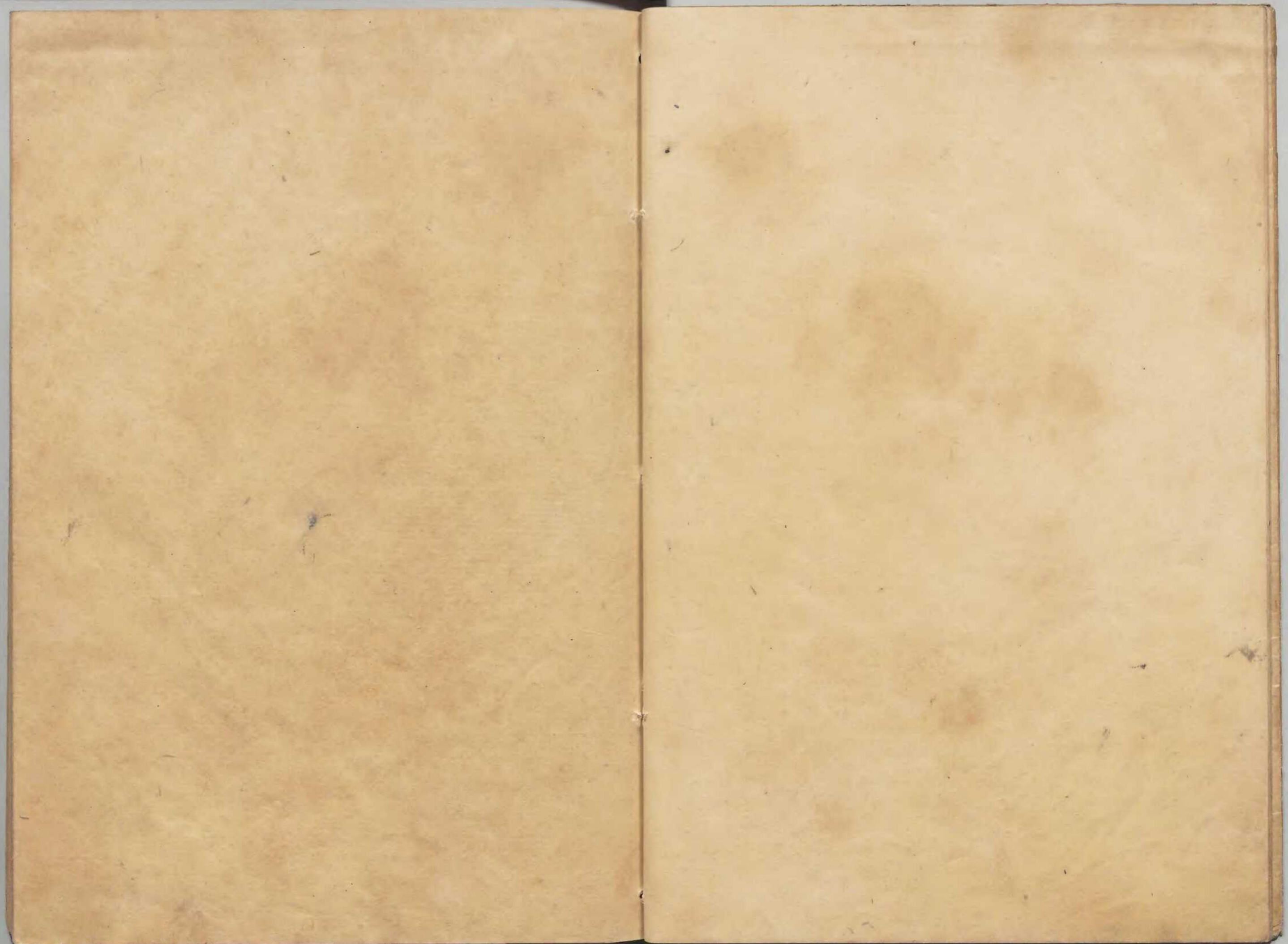
明友 あきとも

内藏物 うちざいぶつ

寛永十三年十二月晦日從五位下つひと

家紋有丸 けのうら

旗幕紋十字字 はたまくら



光泰

加藤

作内 後を江守と号して 中国英徳の
 世、橋治店卒英の地を領す
 光泰 長一とて豊后秀吉に
 了、秀吉に別長濱一
 海をわたりて 横山の城を築塞

小とまのり初倉義系は城ひさひ
て城おまのり教少とさ法士これ
い味を守る光泰自らとくみく
挑戦教ヶ取の意とがかりとそ
死せんともうこり竹中半兵衛尉
城のととのぞくこれら奇兵
を教し急り撃とくを建と救
このゆりく光泰おぬる事
とゆきよりとくりをひく飲

七百ととゆらるととるか十余人と
あつた

天正六年秀吉播磨之本の城を別
氏とせんとしとそに本陣の跡よの
て士卒よ若ていく疾病なむび
傷疔あつたおまのりさぶと御
里りののこりとまるく賦税
衆の事をほくしるしとるこの
ごまのり光泰請ていく我に列乃

我は勝と傷てより行かぬれさうね
とと尋常の軍入りむしうん
やととけあり憤と教しとく
先延りしむしうめ秀吉のいんく
二本と藝列とハ唇志つるにうて
毛利が従兵さう砂の浦は抛く兵
粮のゆとらる二本の城をせじとく
と策糧の道と絶りうらるるか
とととれらえ泰をしとく

二本と高砂とのるりあり多胡草
ととと款の及成彦しと光泰寝食
を口とし法率とともりしとく
禦事とと城申糧法ととと
守る事しととととととととと
父ももに自害しとと二本の城と
とととととととととととととと
よととととととととととととと
秀吉は築田務家と征せんしとて

を以て越前の境よりとひく大よ戦こ
き光泰軍忠とつら一徒兵おろく
首級の四わりより丹波玉園山の
城より徒一萬七千石と銘と又江が
貝津の城よりつり又同玉高乃
城より徒二萬石の比と銘と
うらら又尾列大山の城よりつり
又遠列大垣の城よりうららと
百石の地とつらうら別よ二萬

石の代友職を司

秀吉越中國よとひく依内務助と
征伐のとき光泰又軍切つりその
後沙劔氣とつらり大和入納云
秀吉より属一合道一萬石を銘
と少頃あると和列宇多郡秋
山乃城よりうらら一萬六千石を
銘一石丁ら事業種をなす
秀吉の原免とつらり江列依和山

の城よりうり精米二萬石をもち
り後小位下り叙せし聖子甲
列二十四萬石を領す

文禄元年秀吉日本の兵を
朝鮮國と征らんとす味方倭國よ
後海すらす援兵と請ふるも秀吉
婦をむび兵とまゝ一軍すてり教
らんと死おとせ守らむは光泰
命とけし後り軍おとて名後

危とおく朝鮮よとむじかんうとそ
小纜と解の日

東照大指現うとげうと後口り
沙牟原ありと異域の好と音
且軍旅の事と治し海ふ光泰慨
わりのく別をくまうらとそり
朝鮮よりうり日本の治めと京城
り今よりうらとそり治めのい
今糧とがく兵あり一人の兵と

又あり龍とてとらうく軍兵と谷
山浦よりかして事と名護屋
うのつひ命と詔たり傳人
謀と廻し後事と災ら切らる
まや光泰がいんくの谷山浦を東
のこ京城と事投百里が宿なり
こころとてそ彼京城のこま
らるる——か友身路清正瑞
か守主茂の解とを趣

西のこ教百里の介りあり今この
軍京城とそそをいれ何ぞ
清正とて海軍とゆんや
と京城りといひく清正と茂と
なすなり詔のいんく清正と茂
何連の口海とるなや今
わらり詔率何と命して彼と
や光泰がいんくとて我一人
あまく清正と茂と約

遂に権執の端とすなりてよをひく
大時の共大なり龍衣未取克泰法
乃りて若くこれを懸ひしりんと
しるふことありし法乃曾て我攻
事といふことして治りし法極
とさけんとす克泰とて是と
けふとて立花を乃監之と
教していふと我攻を我祿と
る立花すといふと先延とありん也

なりてにをひく小島川降系も又
これより同なりなりと法乃
教く我祿とす若くけと
味方の士率大時の共こといひた
克て首級之類八子館とゆりこれ
よよりとめ人ほありし取を
後加茂清正朝鮮王なむびと子未
と膚京改りし来會はとて小坂
陣のとれ克泰あ生浦小いり

て鴉毒りかり卒と多末十七時
文祿二年八月二十九日なり

貞泰

作十郎

従五位下

右衛門尉

右近大夫

十四歳のころ父光泰卒と文祿四
年甲列を去て濃列墨地よりつら
四万石を領す

多末多石田三成誅叛を企つし

貞泰ころごと

大権現は通一とくまうり才光と

人質として江戸よりい且飛御

校廻をりく忠節の旨とつ

大権現沙威のあまらよ由書五通た

まふそのことごとく

五通は書状を校刃名を念ふ前

原首尾すお忠節は威感

今日玉小回原と相馬の急
進之表可お為陣以流之元
のら入情後肝要のらと法也

九月三日家康沙判

加友在湯つ耐友
亦中丹後ら友

切ら入会書状祝之志と玉の珠大也

成之方は是早相海作
之海是作好又先自は冬陣由
尤作今日玉于清忍寺らと急
之る能る之表可為陣
之る能る之表可為陣

九月六日家康沙判

加友在湯つ耐友

しりりといて

大権現の先延井伊長初少将及が指
魔よ悪くそとむらひ日玉を回よ
殺向し大酒の城よ對陣と

大権現同玉系坂よ伊本陣のやうさ
貞泰よの地よ赴お禱しもう又は列
佐和山りといひ

大権現よ禱しうらやうりうごころり
貞泰るいびよ稲葉右京亮 釣命と

かうゆり長末大花少将が居城ありとせ
じ貞泰稲葉ありといりそとひき
ひあいの城よひふ取し長末一戦
り及むしう城を捨く逃るる
うはら

大権現の沙汰しうらやうり大坂

りいりる
まを十ふの伯列米子の城より
二万石の領地とくうらやうり
本知

四萬石より六万石と銘を

日十九日大坂陣乃わつと松平

因防守畧部内膳正木と陣と同一て

大坂陣と同一て大坂陣小を

松平武藏守と陣と同一て林崎口

よりともいさる

元和三年

名徳院殿の釣合よりして豫列大例の

城よりうつり給地よりいこ

日九年八月廿二日江戸よりいいて卒を

歳甲申 法名玄雄

家紋 友丸蛇目

光世

平内 遠江守 中園をい

名長四年 林原式部大將康政

とあり

大権現よりお福

日又海上松系橋と征伐

とくは光武病は嬰

涉流よりらんせゆ

山よりとひく

大権現より福 釣合

とかうゆり右河より船

をらうとくりて江戸

このとき水井右近大吏

十六湯尉よりく二百人の涉

扱持るひし傳る十

且又舟多舟下とりて

いふ不方保書

本所の温泉より浴

とくは光武病は

とくは光武病は

同年国原涉陣

日七多濃列

十一石の領地とす

日十九年大坂陣の時さあゆ

隼人正か継りし居して

し

寛永三年沙使者となり

將軍家より

同日正月五日従六位下叙せ

進を以守りし

同日正月辛と歳五

法名道換

寛定

平内 生玉氏

寛永元年

將軍家より

同日沙

女子

加友信法書が

女子

同為彦太即が妻

女子

村上太即兵衛尉が妻

女子

赤中丹後守が妻

恭典

五郎八

のらお羽守と号す

十二歳のときさくらづめ

名徳院殿

將軍家よお湯しそまつ

え和九子父貞恭卒と号す

名徳院殿

將軍家の教令とかりゆり亡父が遺

命豫列大例の如とお召す

寛永え子従五位下よ叙せし

お羽守より何れ

正泰 まさやす

職部 しやくべ

十一景のとうこうくわん

名徳院殿

將軍殿よおつて

女子

細川 ほそがわ 玄蕃頭 くわんぱんのかみ が書 か

家紋 かもん 上巳夜 かみづみよ の丸 まる

常正

加藤

大御方 常正 尉 中園之河

廣忠 口より

天文十一年二月十七日之十二日

死を法名性悦 道号法名

皇子
重常

小倉東門尉 生國曰お

享正四年

東照大権現よりくまら

元和二年

台徳院殿よりくまら

寛永二年十月十八日卒あり

死を 法名常心 道号則蘇

皇子
重正

勅助 生國をい

享正六年

大権現よりくまら

元和二年

台徳院殿よりくまら

將軍家よりくまら

寛永十年 作よりくまら 鉄炮同

心三十人とあひら

日年布衣と着るるゆり

重長

橙衣の尉 生國武苑

貞永三年十之月

名徳院殿より

同九月十九日

將軍家より

忠重

大石門尉 生國日前

將軍家より

重長

牛の物 生玉武苑

重正や一の子

半七郎の子

寛永十一年

將軍家より

家紋

下夜こげの丸まる

利正りせい

九郎次郎

又九郎右衛門のり三考さんこうと

利成りせい

新六しんろく末

生五伊勢いせ

加友かゆう

利仁將軍しげのりの后胤ごいんなり

生國日前

廣忠ひろたけつよつふまつりのち

東照大権現とうしょうよつふつふつふつ
まはらまはら八十四歳ふくむ

来

比祢丞ひねのせう 生國日前

来

比祢丞 生國日前

大権現おほごんげんよつふつふつふつ

元龜げんき之年を列り之方かたが原はらより

とひくとひく後ご才さい源げん守しゅ郎らう一ひとはよ

討死うちし

正任せいじん

新あらたなるし生國日前

藏くら回まわ信のぶ長ながよりつふ尾おし列りよ任じんを

正信

九郎次郎 生國參河

大指現よりつてくまの系

永祿六年冬之河よりとひく

徳とあはせ戦甲あり

え龜三子を御三方原に陣

のころこのかゝのりらとをまふ

正信志んくもばとらるりて

多す戦場より死くは忠を

謝しをくまつらんく終小

をそのとらる十二月大言二十

歳よりく戦死と後の日或回

備料陣中より正信が戸懸を

さるい河原に参つ正次おひひて

これとらけとら

い外に正信事幼年より

大指現よりつてくまの系に校度の軍志

ありとなく

某

源守郎 生國同あ

大指現より 信久より之方原よ

とひく兄正信と行なりし

二十一歳より討死

女子

喜ぶ事つ耐正次が書こたふ長物

正幸が母なり

正勝

源守郎 生國同あ

十一歳のころ

大指現より

天正十一年尾列長久の戦場

より首級と討死

そのころ

台徳院殿より

大番の継以こまり
寛永十九年沙汰炮乃玉茶の
奉行とつとち同ん二十一人を
わけり
寛永十四年九月七十四歳よ
て死す

正吉

令内

十六歳より一がれ
名徳院殿とふ
將軍家よりつとくまらる

正成

源守郎

寛永九年

將軍家よりつとくまらるて
祖父正徳がそととけ

正次

新由未の 生玉伊勢

信長より信之より一時的竹本と

号と

大指現より福よりつる時

正次を九郎次良利正が姪たるの

あひびごころ中より三列より後より

ころ 歳余ありゆより 永祿

十一月参列よりつる

大指現より福見よりなる時 釣命と

かりあり竹本とつるためありび

加友と称と

大指現を引取入玉の時信之より

のち 伴よりよりく九郎次

正信死して子なきゆより正信

が妹と正次が妻より 能比なるび

より 是將二十人と西ありけありて

正信が家督とほがしりてまふ
正次之を在末の正任が子あり
天正二年

大指現とて信長に武田勝頼に
冬列長源一とて合戦の
うら西次七挑灯のうら一柵
際一をひく歌軍の勇士
西次をうら共首級とて
日七年を列井呂一をひく

味方引まるとくの河原隈一を
かといはく浄信の人とて
森川合右末の西次あり
しげけ信よ

大指現とてしりて友人と称す

日十二年尾列長久平我場一
しりて我いましりて
うら一歌とてうら首級とて

とぞり合戦より乃ぞじのさき
士卒ふつびく決死とんあし

しじ

大権現げまじりて沙威あり

日十八年 園東入玉ありて二子

石の館死とこまふ

まよふ年 教令ふりあひ

又騎よび決死の足怪又十人とい

けりりく 京都所司代の職を

しじ

翌年事ありけり職を

しじ

同十八年辛未年ふりて

正重

表助

長年十六歳し

大権現より福しりて

くらと追侍と

日又年と叔系孫と治中

と又奴のころと修承と

岡原陣より従なり

うにともひく送統と

治ありとく伊戸より

とあ領と

日六年又正次ゆ

えれりよると正重と

とあ領と

大指現殿命あり

とあ領と

日十八年正次死と

父がまを跡とつぎ

卒とつづけらる

日十九年元和

陣より修承と

とあ領と

とあ領と

とあ領と

寛永九年与力大崎をらけ

同十年五十一歳に

正之

彦右衛門

元和八年

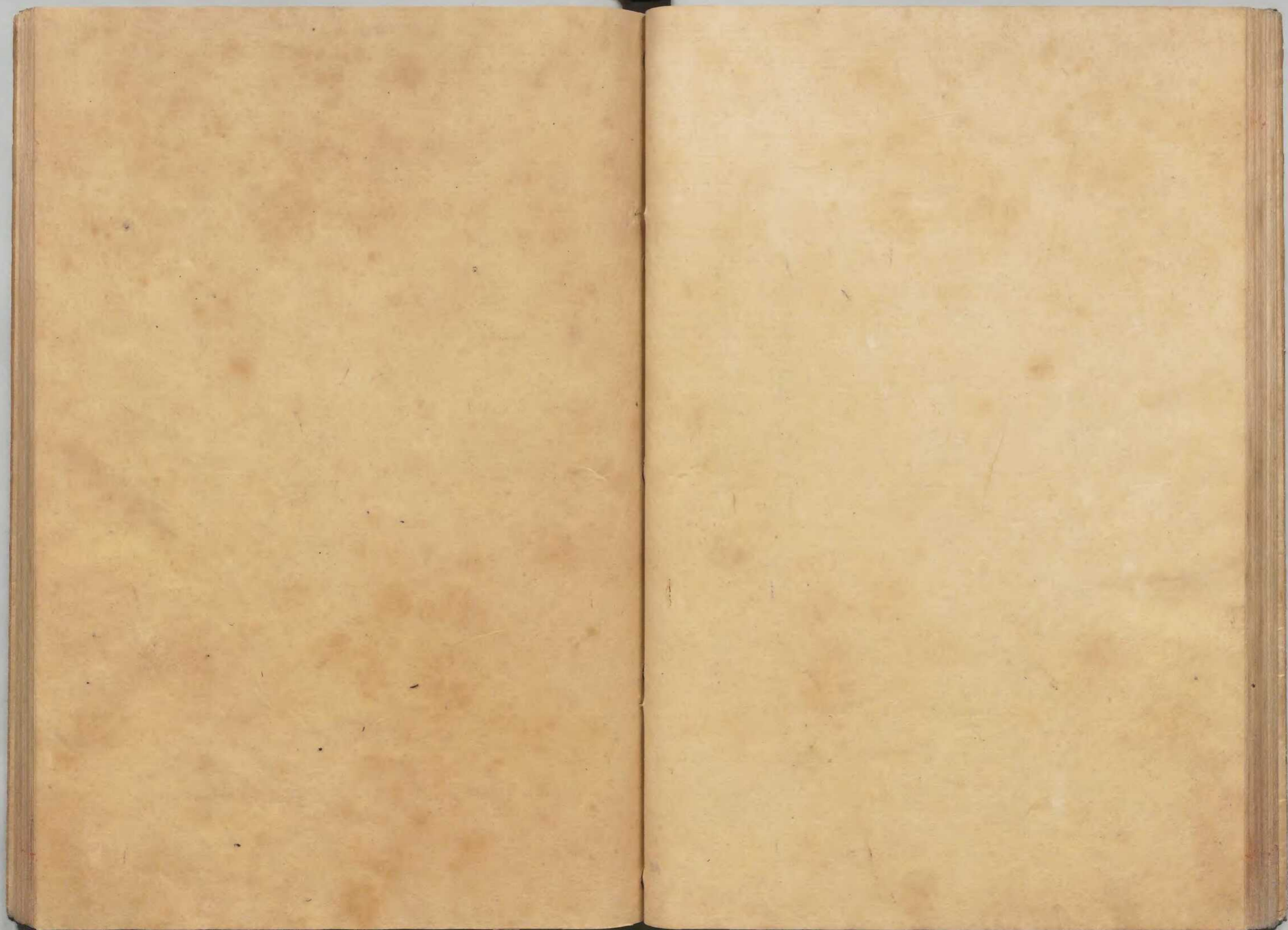
名徳院殿

寛永九年二十歳に

將軍家より

同十二年西小姓

家紋 下友の丸



加藤

氏次

助右衛門 生國冬河

東照大権現よりつとくまうつ

元和九年二月廿九日十八日歳

しつとくまうつ 法名 宗名

則勝

伊織 生四日前

十二歳少くくくく

名徳院殿よりつかりくまはる

大坂陣の元徳院殿と成り

寛永十二年三月十一日六十六歳

少くくを法名若飲

則吉

掃部 的らぬちあつと号と

生玉武彦

十五歳少く

名徳院殿よりつかりくまはる

元和六年

將軍家よりつかりくまはる

則次

加兵清 生國同前

十二歳少

名徳院殿下取下福下一十五歳下

將軍家下一下一下一下一下一下

家紋

下下友下

● 忠正

加藤

傳右衛門 生國冬河

目玉墨海

東照大権現よつて

正茂

茂在東門 生由同前
昌次子なる

大指現小つてくまつ

天正十二年己未年平沙陣小指存
款このあひをこれと討捕付時
をうり少く不行支なる
以徳俊と稱るこれ食邑をた

まふ

まふ久子年六歳よりく死す

正信

傳信 生國甲斐

正茂が赤子なる久未ハ半奥減
昌次が子なる

昌次生國甲斐

天正十年め

大指現より瑞一とくまつ

同十二年長久寺陣より修守一

首級をゆとり

長久寺六年園原陣ありまこと

かひとくまつ

長久寺五年正信

大指現より瑞一とくまつ

名徳院殿よりとくまつより奥列

陣より修守と

日十少子大坂西陣より牧野内近从

信成が総りつたなることやく

首級をゆとり凱旋の後水前

とくまつとくまつ

え和子年後河大細言忠とくまつ

つけれ後府の書成つとくまつ

日十一年とくまつ

將軍家よりとくまつ

正ま總も

孫まごた忠ただの 生なま國くに武ぶ統と

寛永十三かんえいじゅうさん年ねん

乃な軍ぐん家け一いつつつくくくくくく

家紋

友ともの丸まる

● 正成

民部大輔

美濃乃國よじゆら

加茂

光成

平大夫 生國回前

豊后赤松一守

文祿二年五月廿七日七十一歳
〜死す 法名道心

成之

本居東門尉 生國回前

天正十三年

東照大権現より湯〜〜〜

小田原を〜〜園原陣より

〜

慶長八年十月廿六日伏見より
〜〜〜十二歳より〜死す
法名 玄法

正方

本居東門尉 生國徳也

祖父光成卿〜〜〜子と

〜〜〜秀頼の許より〜

元和元年六月〜〜お〜

大権現よりいへりてくまのりそのら
名徳院殿よりいへり

將軍家よりいへりてくまのりいへり
秋友持はちが継りてくまのりいへり
継の書よりいへり

良勝

今名は忠門尉 生國氏院

寛永十五年

名徳院殿よりいへりてくまのり

寛永十七年十月十日

七条よりいへり

成勝

源太郎 生國氏院

寛永十三年

將軍家よりいへりてくまのり

正勝

市兵衛 生國 拾津

元和六年

台徳院殿

禱

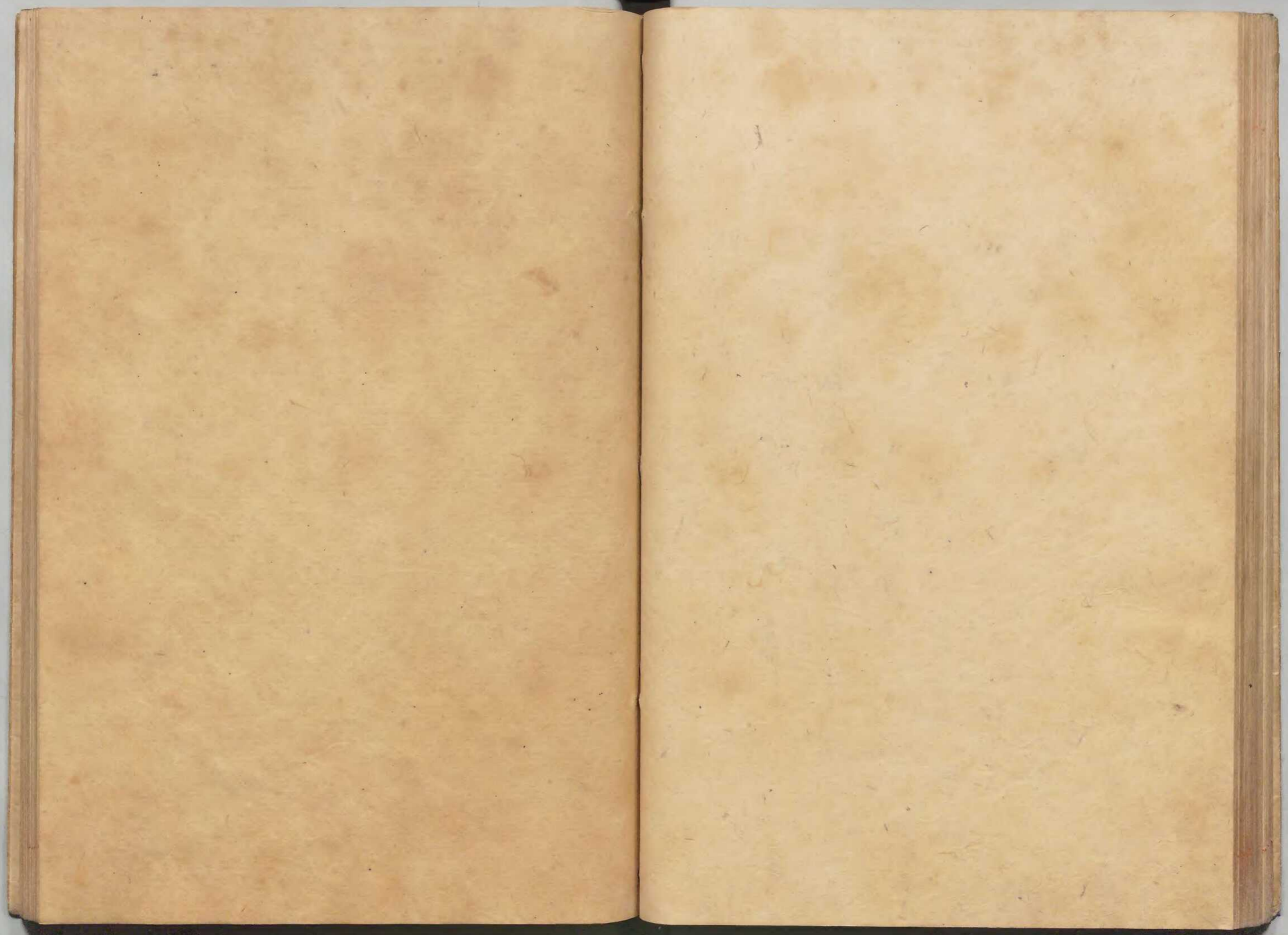
寛永四年乙酉小姓組の番と云ふ

日九年六月と云ふ病氣と云ふ

清書と云ふと云ふ翌年と云ふ

山善清の役と云ふ

家紋 友の丸



果

加茂

新次郎

生國之河あらし

廣忠ひろたけ及

東照大権現よつとくをくほつ

之列西の郡よとひく合戦のこ

ま、謀老まうらうこなり軍も嵐あて

討死

包秋

新次郎

生國同前

大権現

名徳院殿ふつふつとくまら

享長七子六月軍六歳少く

痛死

法名徳院

通有

六右衛門

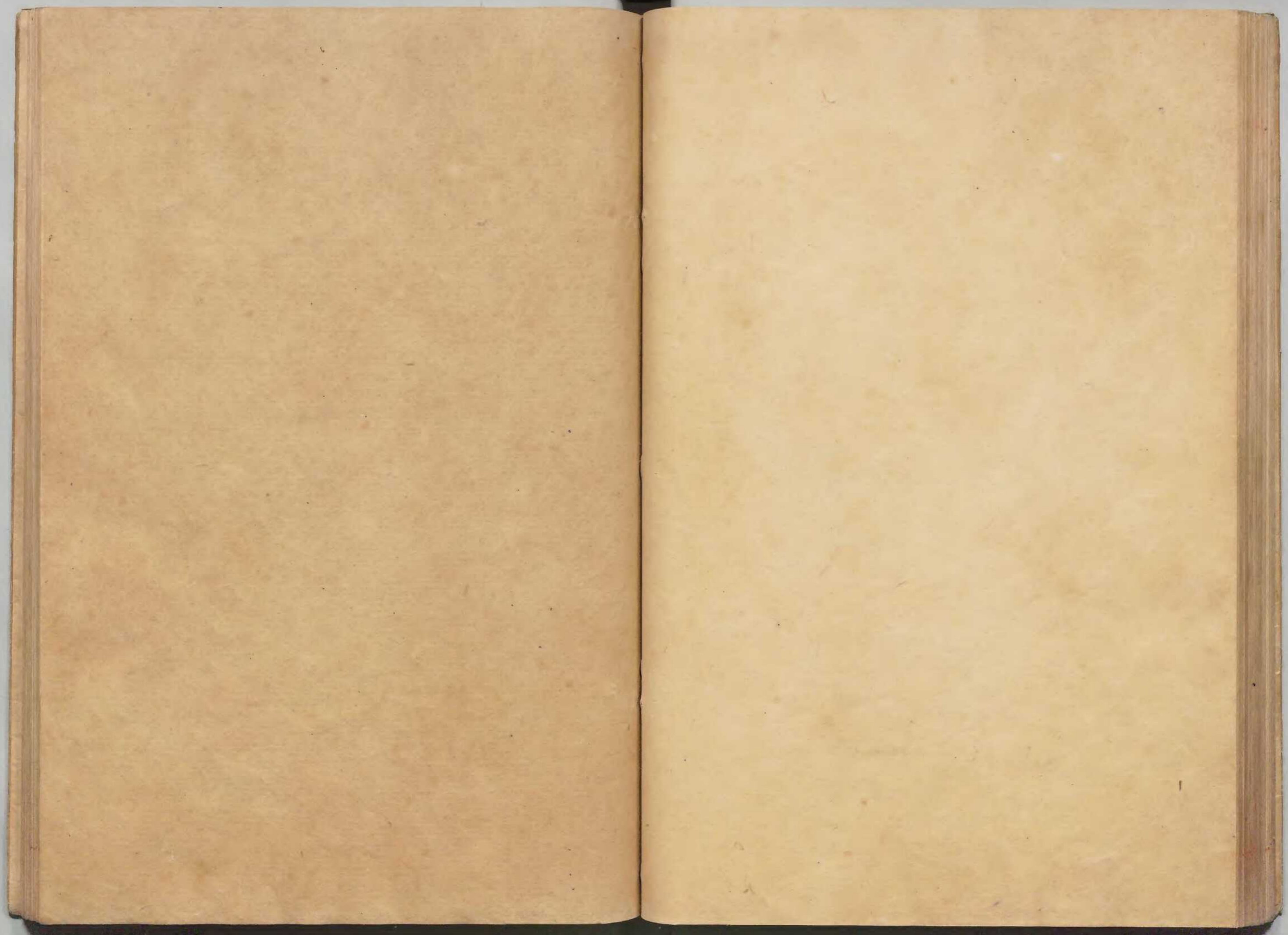
生國武家

名徳院殿ふつふつとくまら

將軍殿ふつふつとくまら

家紋

上友



● 某

加
友

甚か
右
某

夫
之
河
山
中
よ
じ
り
ん

清
康
君
り
つ
ふ
り
は
る

正
成

想
た
某

生
國
同
あ

廣忠つりしはふまひれ

天正六年九月廿四日午歳行て

死す 法名永忠

正次

越市郎 後よ劫在東つこ号と

東照大指現

台徳院殿ふつふつとつて水映地

同心のよの軍人とあげけらる

永祿六年冬列よとひく一向宗時

越のころ小豆坂少く高名と均ら

同玉計海合戦のころ高名

同國和甲しとひく高名と均ら

同八年三列台田戰場少く徳成

あらせ成と均ら

同牛窪合戦のころ徳成河らと

元龜元年三河列姉川合戦のころ

高名一成と均ら

天正六年 後列 皇自 小 びく 首級
と 止 一人 と け ころ
同 十二 年 長 久 平 の 合 戦 小 高 名 かく
の じく 八 ヶ 所 へ びく 戦 切 あり
長 十 四 年 八 月 廿 四 日 七 十 七 歳 小 高
名 法 名 淨 哲

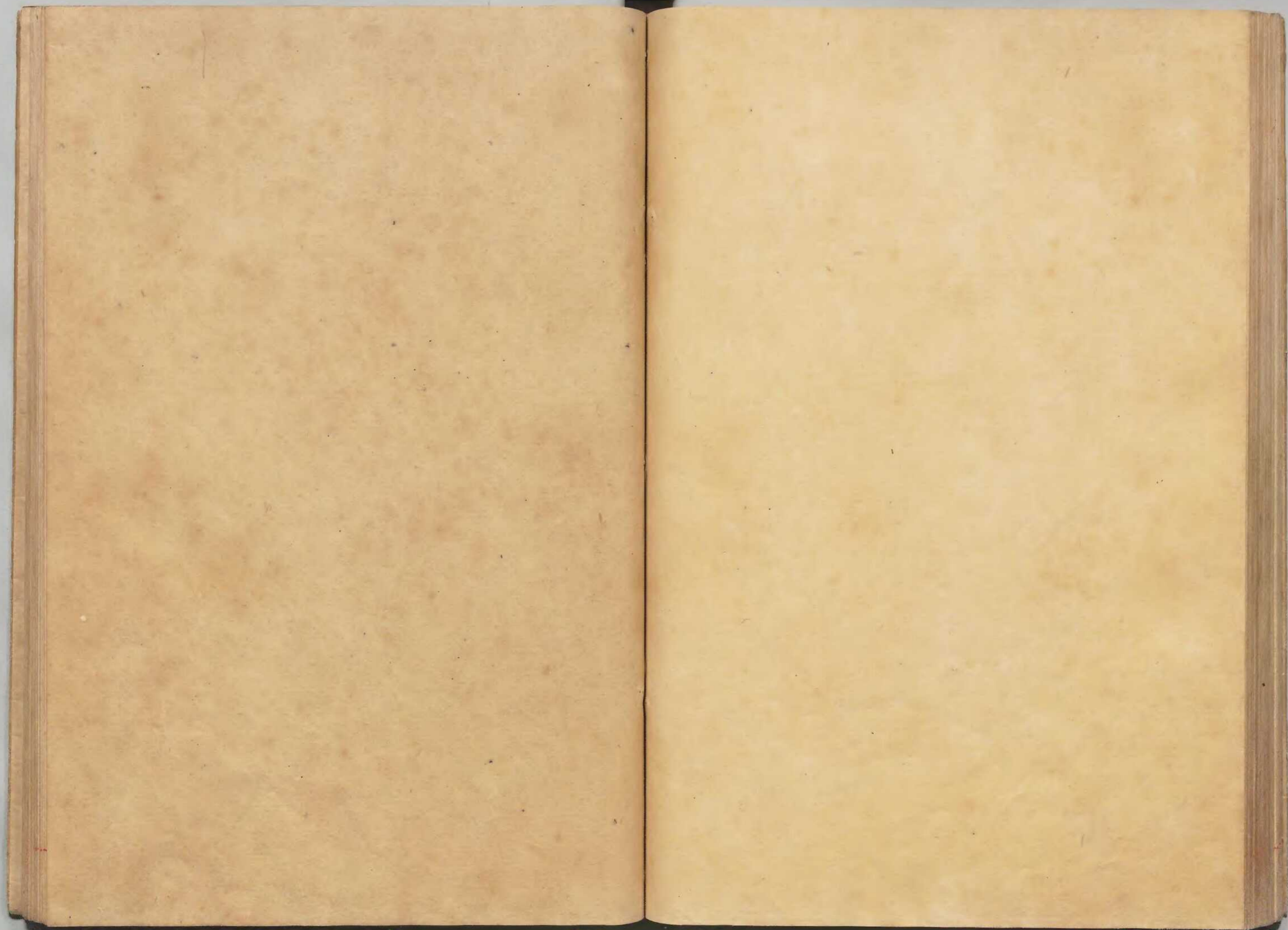
正信

劫 在 東 へ 中 國 同 前

名 德 院 殿 及

将 軍 殿 へ 一 つ へ へ へ へ

家 紋 友 の 丸



京子後子

日記子 生國子同前

● 賴子京子

掃部子 生國子之河
清康子君子了子

加子友子

廣忠ひろたけつりつふまつ

系元けいげん

長ちやう長ちやう門かど 後ご橋はし磨ら也やつらつ

生なま國くに日ひ前まへ

之これ列れつ安やす祥しやうよき 廣ひろ忠たけつよつ

うねら

東とう照しやう人にん権けん現げんつらつ

之これ列れつ長ちやう崎さきつらつ 清せい書しよ以もと

三さん七しち十じゆ一いつ歳さい少せうく 死しと 法はふ名な

宗そう榮えい

系親けいしん

之これ小せう郎らう のら 久く右う久く中ちゆうあつ

生なま國くに日ひ前まへ

名な徳とく院いん殿てんつらつ

寛かん永えい平へい年ねん以もと 六む十じゆ九く歳さい

少せうて 死しと

系重

久太夫 生國貞翁

寛永六年

將軍家よりつゝつゝつゝ

系治

助在東の 生國貞翁

信康よりつゝつゝ信康之墓

系吉

長太夫 生國貞翁

寛永十六年

生海ひくらの法祥一 隠居

寛永六年のまじり

人権現より好福

同十一年 軍之歳に

法名浄安

右徳院殿よつゝなり大沙書院
ほむじ

家紋

丸の内丸字

菜

平菜 中國同前

菜

掃帚 中國同前

加藤

正久

忠貞の 生國同好

清康君 廣忠の 清ふまのふ

法名 淨蓮

正重

市六郎 生國同好

東照大権現の 清くまのふ

正直

ら直史 生國同好

藤原守忠の 清くまのふ乃ち尾

法大納言義直の 清くまのふ乃ち尾

七十四歳に 清くまのふ

法名 祐念

正勝

市左衛門 生玉後河

大権現

台徳院殿

將軍家よりつづつて

水納戸をとりとつとじ

正長

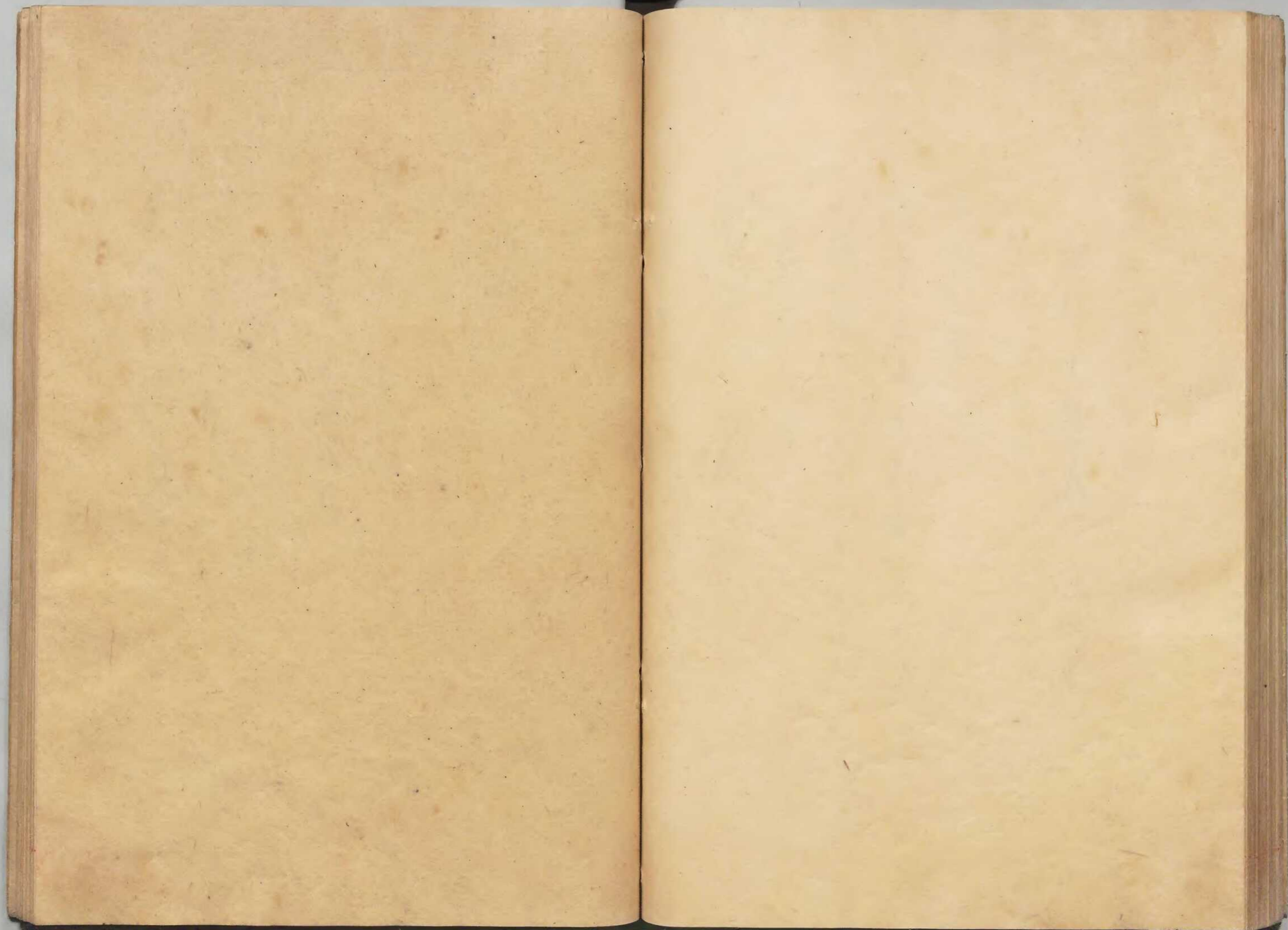
徳高 生國氏

寛永十一年

將軍家より福

同十二年大津藩と

家紋 下友の丸内よ加の字



成者

加友

若翁 中國武翁

小條長也

天正十八年

東照大権現より

台徳院殿より

享長十二年より死す

成沢

田原兵衛 中園日記

享長十二年

名瀬院殿よりつゝくまら

成久

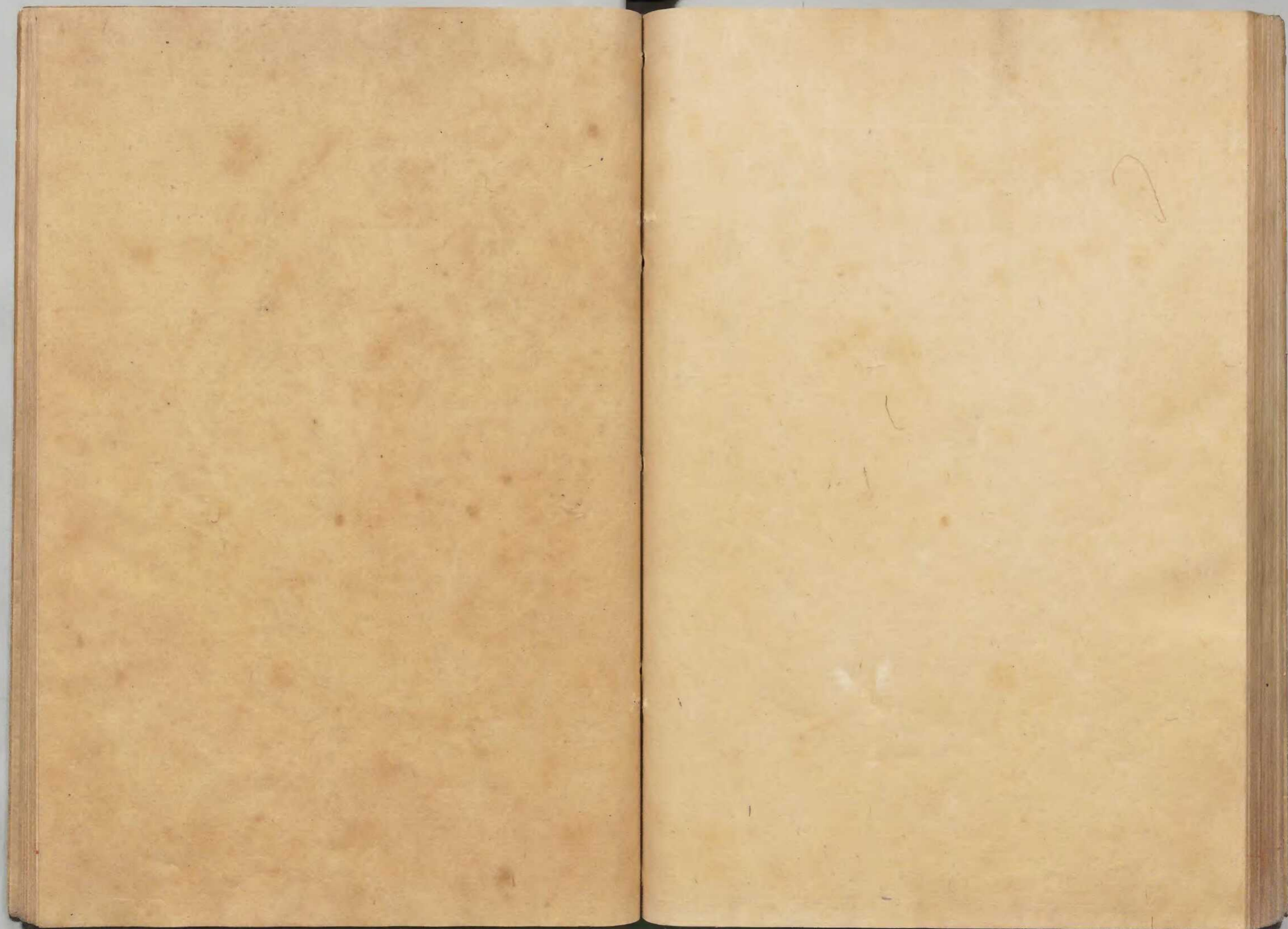
檀右衛門 中園日記

寛永十二年

將軍家よりつゝくまら

家の紋

友丸



● 集

加藤

加藤 生國

東照大権現

八十八歳

一義

平右衛門 生國同前

大権現

台徳院殿よりつゝ之くま

六十二歳ありて

一重

平右衛門 生國氏

台徳院殿

將軍家よりつゝ之くま

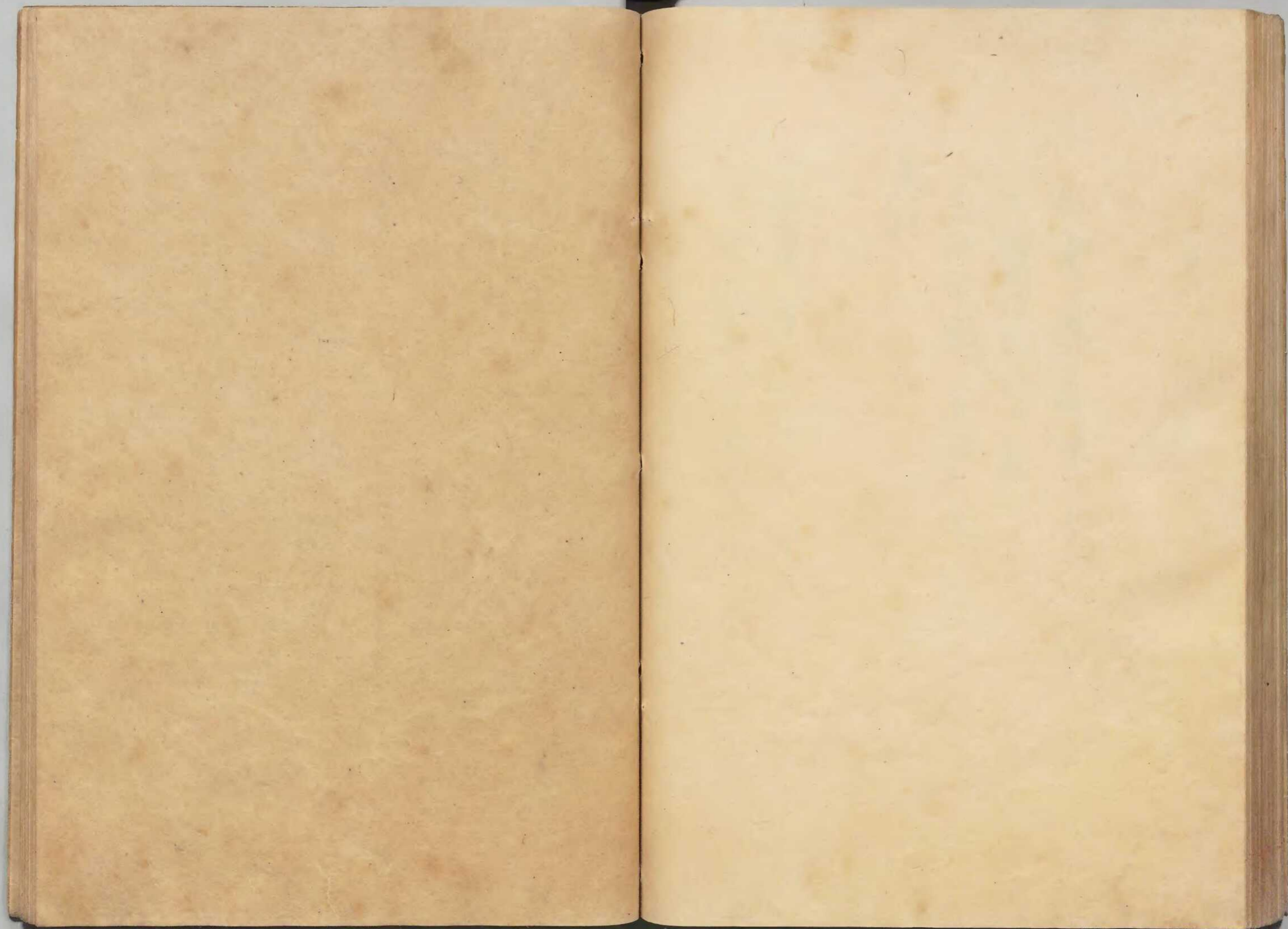
義休

権十郎 生玉同前

寛永九年六月廿四日

將軍家と相礼しつゝ之くま

家紋 下取丸



長房

加藤

世に果つ 生國之河平

廣忠のりつりつゝそのら

東照大権現なりつりつゝそのら

長次

長兵束 生國日前

大権現

名徳院殿より

寛永二年六月十六日江戸より

とひく七十七歳より病死

法名 道清

長正

長兵束 生國日前

元和六年

名徳院殿より

寛永元年

將軍家より

長延

八右衛門 生國氏

寛永二年

將軍家より

家紋

下取の丸

元末

長十郎 生國同前

廣忠つりつふりけりまは

東照大権現つりつふりけりまは

六十二歳ありて死す

元治

長十郎 生國同前

大権現

名徳院殿つりつふりけりまは

六十二歳ありて死す

治次

甚之物 生國同前

元和四年

將軍家つりつふりけりまは

寛永十年よ采地とたまふ

家紋

下^{さげ}敷^ぢの丸^{まる}

● 菜

加友

想^{おも}お^はせ^して
冬^{ふゆ}河^か山^{やま}中^{なか}よ^よじ^じま^まら
廣^{ひろ}忠^{ただ}つ^つり^りし^しく^くふ^ふの^のら^ら
東^{とう}照^{しょう}人^{にん}権^{けん}現^{げん}し^しつ^つく^くま^まら

台次

新出湯 生國同前

人指現

台徳院殿より

保次

八十郎 生國氏前

台徳院殿より

多のち 教命とあり 後河
大納言忠長より

保貞

伊左衛門 生國同前

寛永十年

將軍家より 好福より

日十二年 保次より 忠長より

領事

家紋

下坂さか

の丸まる

心重こころしづか

之乃命 生玉後河いづれ

名徳院殿よりつるまゝくまうり大

清書とつるま

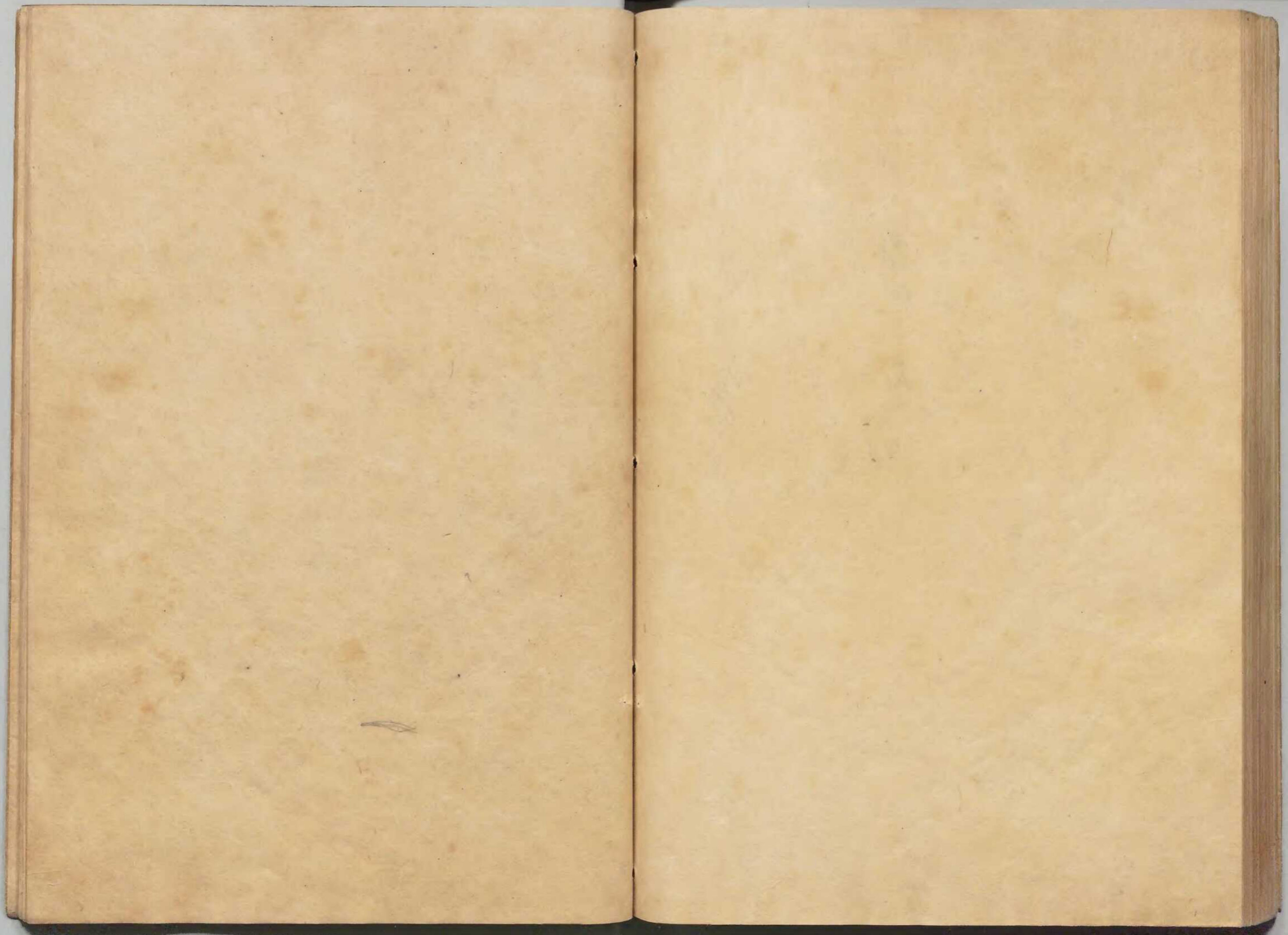
心剛こころつよ

令ふ高 生國成務いづれ

將軍家よりつるまゝくまうり大書

とほまの徳地とたふ

家紋 友の丸とも



● 忠京

加藤

高島忠兵衛 生國尾張

日守長久手 守備

織田信長 守備 若崎の城

新居

天正十二年 長久手 戦場

討死

京正

権右衛門 生國同前

東照大権現よりしりかたれり

名徳院殿よりしりかたれり

大坂毎夜の沙陣より信守すべし

河部海守が継りありき

級と均し

寛永七年八月六十二日
病死

正重

清兵衛尉 生國氏

寛永十九年

名徳院殿よりしりかたれり

將軍家よりしりかたれり

正次

檀右衛門 日圓くま江戶えどよじまり

寛永十一年

將軍家よりけしきくまり

家の紋 九乃字

正安

加藤

之七
酒井
天正
六

正忠

之太史 生國日前
酒井忠次より行ふ七十九歳にして
病死

正長

市大夫 生國日前
くしめらるる後酒井大膳より行ふ

正長七年

東照大権現より行ふ武列
忠の涉城者として十一歳にして
病死 法名浄島

正勝

市大夫 武列忠より行ふ
名徳院殿より行ふ
寛永五年より武列忠の涉城者

とほり

日十七年江戸よとほりく沙奕の
昔とほり

家紋

有丸 丸の

古久

年々物
武蔵
江戸
よじり

古正

久太史
生國之河
と波山城守
がしり
らよわら

加藤

十日衆のしるし
將軍家よりしるし

家紋 下取

正則

片石右馬允 生國を以

加友肥後守清正より了

享長八年 八月廿一日より了

加藤

中右片石右馬允と正方より

いづら〜加藤より〜了

